



並免志枕糸巻之下

追悼之句

た乃く言葉書略

美升如雲や乃乃手向州

長子

祖竹

瞿麦や海より水も深う糸

二男

竹裡

短衣如糸や巾巻とさあもきよ

妻

加乃



あ海に如きうの存子たうれ  
あうい又足糸糸人子あき  
たう糸のこ残まじり



あつちのともいふ女もあやあ

妹

の娘

夕色乃神りさゆき源のち

里志

その中の移る安中嬰粟赤

みを

尚事しもをり山梳子北志の高

明器

あま人の記高巾り乃栗衣

曉山

一輝乃再糸のうらやちき原

可蘭

あま人の多向如美巾玉白る

如髪

玉帯一やあまの梅あま塔のこ

壺月

はあまきすわしき一輝乃勢

謂庸

あま巾志事記海鏡入梅の句

野牛

ふゆもくあまのあまきす

春江

あまのうらを後乃くまや茶草藩

季栢

あまのよあゆき袖乃なまらあ

超悟

あまの志折はくまの多向巾

乙坡

あまのよしにあまの草草如徳

馬北

面新やまらうあまの句あま

字樵

出しけのふをききり部公

巨山

夢如を乃面氣まじく塚乃月

松芽

一考き夕日ふ連くわきまに

西望

路叔ちくふまのしをききまに

兀仙

と路のあや世山り星る 杜 終

悟六

あうく奈く高海じん夏あろも

涼秀

系心蓮り志はせりま向うか

桃李

あもまぐ花氣あまきまに虫

兔雪

糸井

短衣巾なるを啼袖をかきまに

時中

百重銭歳きくまに部公

芦仙

杜宇きくやきく人聞ぬいと

文眠

夢やあまぬ表まにま袖を杜終

西涯

生ありし菖蒲もまを八志海連亮

日妙

塚乃空如林くまにふまに

袖雪

あや流名子芥子如公言一重

三休

閑度銭幾貸や本く筆書

魚舟

あつしそ乃初を冥のそれ意うぬ

洛

嵐月

亡き人の逢ふ場乃夏如雲

分々

花樵

幸しちりき言なき初乃白い哉

竹田

素桐

層の衣織りきく涼しや夏の月

岡

宇空

こ乃中を瀬伽り手向ん芥子地高

竹田

四茶

岩陰中瀬伽り及んそ昔如舞

湯島

魚潜

白雲雲子侍る川昔有たうあ

湯島

思一

今もそ乃ちやハ法一杜美

長圃

至合此そあはし高哉手向哉

貫民

如きみそとあり人そ中一杜宇

再可

美并ふ明く清り月多

竹貫

梅溪

花多も強く多舞一塚乃月

白民

友如おの月も入侍のやうききあ

芝岡

新塚子そ中吟如虫萎然花

其夕

管老の場中そのおれ袖の高

由茂

いしや瀬伽乃あぬ袖よそ月る

浪花

尺艾

と一法其の事なり  
世に傳へたる事多し

形海の

茶の枝以う少く死出此山あり

至峰

神歌の書

人恋しきを此の山をさして

洞水

きくりつ帯もいとくうなき

奥の乃松可き新成おくり  
漸とと芳名は是なり海へ  
秀をとり作り

玉屑

此を問ふ塚乃月の中あ乃

瀬伽汲袖り反た夕芳

祖竹

山成抜く治乃浦風好き

至峰

酒の之し家無ひ事り

明器

穉あし起十六表以乃片日和

竹裡

雁耳其言此表り海

屑

秋乃搖十着乃荻菰抄爲く

凡う秋より子辛味の中人

地車小懐より運ぬ丸太枚

署子相明乃星くくあり

較乃く移り月の入りも多に

後吹園坐り待くと来ぬ君

小田原の乱甚成恐お祈望

移く五尺乃雪さきを

竹

峰

器

裡

屑

竹

峰

器

費あ多し一 坊舎を請ふ平右兵

勅使乃下連人拂ふあり

日和より多里く志より来か

蚕北葉成り市子賣り此

雪解り侍水く出く箱佛

木乃北軍や信く靴く人

乃乃荷より筆北小寺北啼路

思進の雲北菊く白を

裡

屑

竹

峰

器

裡

屑

竹

初より戸子馴く九月此月迄く

響く漆乃乾く白く世

秣多ふ馬の荷鞍乃打返里

く雷乃岩年一山と木

以て本乃庭の美弁切透く

杉河を拓く加籠俣を守り

急乃果を芽野に換利く

入歯の糸乃切く清く巾

冊

峰 肩 裡 器 竹 峰 器 裡

有仙耳花明の気氷く人

層流臨世年一屯く事

妻手く下流く握を打く事

女残可く輝乃死く事

惜ましく赤き皆ある事此陸

真乃赤くくの肝平場を

骨 竹 器 裡 峰 草



春

月と日此中を落すや夕雲を落

洛

圃更

揚雲雀入雲も高き日知の角

僧

東適

麦菜種都を中ふさふ乃風

土卯

蕨入乃糸肩をさぬこーや糸

南部

其成

山伏乃能き家持より赤松

仙臺

平角

等や深山是より水音多し

雄

雄

今も花妻此人押さるる物さう

謂原

春も中落出し色くならし

鉄船

梅葉去る尾上り夜乃拾

武州

冥々

入月哉とみし春志林う糸

吹上

葛三

か子世乃人走り去の百

筑前

魯駟

魚好通一篇言し春終る

備前

蝶醉

くあうや生を照し此人住り

吉田

子埤

二三本少川の芝矢野春此家

古

帆

水ぬき加茂乃川原の光る家

日向 可管

春の如く産子白ひらり物心く

冷州 五陵

穽和比子とりふ糸く柳の歌

波洲

空の亭月もあまを秋を新糸

荑釜

多叶や裾地を色分新より

里興

響も新をうつ妻や春乃あ

皓月

雲鳥も春や度深く明蛙

亀文

うちやう世流乃海邊や夕くす

和流

明く志を舞りやあゆら月

雲人

あふ糸乃中尔文阿里むさ蓋

羅十

事柳や春生くく新川式

忻然

紫結雲之海のや柳を春

春安

浪の千たくれ梅乃輪の事

蓬山

糸通乃山冬雪うも膝 月

狐頂

あふぬき春元山や籠子比事

李村

若草を旅の河原あまひらり

柴山

陽春や水も蕪ん池のく

丹久下

音成

引急乃日あし遠中印櫻

文里

夢や片枝多残ふ雪のさ

源月

笠枝隠ふ女う眉素し去所風

明石

五嶽

月出く白いもくは是宮の梅

浪室

半輪

夢水雪舟もや夢て里くつ雪

播州

脱履

雲う夢水ほのくふぬぬ夢の氷

東圃

明ほの鏡のもゆき柳う草

梅舎

去舟は堤櫻をまむ暖地哉

九華

七州や打く夢夢の夢さう家

葭笛

白魚や糸のしりた二日月

仙子

野々梅乃そのあも身を夢れ月

化凌

三々月や梅の影さくあゝ思

起蝶

鏡子啼やなやハ情れ明暗と

桃水

迫りけ夢を言夢れ鏡子うか

如鏡

夢や岨乃枯萩眼さむしん

蛸園

白くあめの一筆よある白ら民

イセ

竹所

七子や一筆よあつる春の味

淡州

言花

春を星哉とく梅や峰はち

瓢瓦

半ちり春のこころやうはら

土居

春岐

梅香やうしりて流るるより

如流

引推し大根を喰ふ春逢う船

牛込

守中

紫や山寺 菊系舟一のる

桃洞

る雪はさるるよ流るる高き

竹野

梅溪

明のころ月はり兼や山さくら

和山

白民

居りける流あつるや春乃舟

画舟

川ををゆく舟のこころ哉

其梅

立友

秋風やあつる海の上

鬼月

糸あふりつきてあつる春乃舟

土田

机隅

切海平はあつるあつる春乃舟

豊園

築風

小山や僧部ものふ梨子花

生桂

涼秀

静けはをよ満ちり梅の舟

戶外

春柳や常春の心くくくくく

文綱

行人の後ろを引や夕や今

義風

春の香針並川の香りく

鳳樹

葉はあふくくくくくく

竹葉

海川や春ハ葉はもよみ

虚白

大和路や桜の影る夕日

行々

春風やあせくくくく

方壺

山をくくくくくくく

文北

あふくくくくくく

路人

陽春や石菖は芽の日

杜厚

雪をぬや居るくくく

隠市

ちりいちに何帳靴く

里由

海士う子息接い別て

多満起

陸社や櫻葉本は中

丁峨

春も北降流ありり

可十

西山や春を言ぬ

杏花

丁十一

出石

遠州

善光寺

上州

筑前

そのふ海少く世間の雲より

越

雷牛

細く戸より梅の白い

西三

まじ川や多しは集も静なる

巨山

くくう集れ脊中合ふ知言う歌

蟄臥

たのう影也け蝶乃世川

播魚崎

車外

等や新る千尋る妻田西

洗洲

村々の門乃度やと腫月

細場

観魚

名由建松風さそふあふの尸

吐月

山をくくあや中帯れ夕あり

ヤフ

祖竹

等々昔千立りく古冥うな

曉山

あ上冬まの雪や桂川

再可

親しきもくともよもりの様哉

如髮

字如戸多美も表も梅うか

う此

正月を梅よるりて神やうい

悟六

等此梅を括ちくまむや梅や梅

至峰

時千求食る友ぬしんまの雪

玉屑

夏

義仲寺

形代子系塵讓る早殿可羅 重厚

武列

ち〜〜と見〜〜を〜〜成美

あま〜り毛昨の忘〜や美松 長翠

葺の葉子出〜止〜五月日 心遂

松乃枝き〜や〜修夏の月 みる

浪花

木の〜子〜子〜引ま〜あ〜移成 八千坊

合競のむを〜や木幡のあま〜乃 旧國

仙臺

朝のふ〜りも直さ次 更衣 白居

若柳

明の〜れおるま〜坂の四隅成 文貫

南部

風鳴〜〜鳴乃修在 山を〜〜我 万戸

六月や手あもあ〜皮あ〜乃乃 毛虹

夕立や草蕉招〜〜く〜〜乃乃 雅遠

一ノ瀬

水鈴啼 木く〜〜乃乃 細流成 葉籠

白石

草芒鳴〜〜乃乃 乃乃 乙二

山幸方哉喜田比夕了可幸

駿

石葉

坂をしと戸ささる在可位名うか

和山

元仙

二ッ事子城子危一築粟のむ

豊岡

一蛙

牡丹之れをかくん子成ぬ系ん

生盤

東走

古香少も啼巾五月如部一云

出石

諸香

門口や人待う海乃夕妻く美

伊勢

安計良

茂葉千啼も志く進く之こ香

伊勢

眉紅

不とそん命めしとく待明一

伊勢

槿馬

涼しと中心をさく次滝乃音

昨夢

夕在如舟中跡りく月涼し

三列

坡仄

卯も中扉くくぬ娘の糸香

竜野

桐茂

杜宇月も聲めは軽くりり

加吉川

五友

くくしりな舞う末乃月おん

善光寺

五粟

婦もまろ子坂の啼る此おん

如嵐

空くや名も弁な記おとく

五什

水音や美葉の靴く是所

筑川



夕月の中あはれ川を流るの兒 蜂二

登る坂の心はくも吹のそね 叫司

蓮子を折んとてよ花きき 希言

露乃垂れぬくもきり 杜あ 柳莊

奥くおく鞠くも雨やまの月 前橋 遊子

夏中の中刈き八郎殿様此瓦屑 磯洲 吐鳥

あま月此をや碎て松の風 備後 柿風

ふとくまは中此枚の言はれ 福山 李朝

屏風此幸初海小町や夕すし美 失名願 若水

観の思なきくもや土用干 女 花巻

藪系巾凡乃翁系おる此雪 越後 雷分

時多鳴中幸寺乃 鐘 赤間関 羅風

あおく松も栢も夏終 終列 起石

葉桜の芽型健しやうんこ香 流石

茶のいろ漸静なりりおぬ香 江旭

己月る中濁く響く三井の鐘 松清

経戸河の千歳を定むる  
浦の千歳を定むる

和の先づ川に寄つて大和蜜  
松蟻

新を中絶ふのまねやほろこ  
青檮

川の戸ハ極く枕のま紫うぬ  
蒼虹

山千歳を雪う白むるを命本  
其夕

そ朝のまじりすし時や海報を  
松芽

海山もみな茶のまを佛と云  
巨山

羽香と花番い鳥や五月晴  
尚古

杜宇を千啼入や朝の月  
巴伎

美弁の動く夕アと朝のりり  
北舞

見取れりる花の紫の白うぬ  
亀令

侏奴を女人をまじりてさりり  
飲露

朝山も日も中をまじりてさりり  
乙坡

明雲を中をまじりてさりり  
馬北

通々を中をまじりてさりり  
字蕉

たかく深く柔鳴きり己月る  
長年

大

大

経中 夢も結さん本とて子安

ヤフ 柳

松陰 子思いこいこ此巻うか

少年 太良介

家鴨子や言るゝあか杜美

三男少年 哥吉

夕色や晴るる 移れ流れる

曉山

山川も静か人さぬくや更衣

う此

経中 夢も子啼 滝乃音

竹裡

雲木此よのよ是迄もあつ事

祖竹

向きもつらぬ 杜子乃夢此

のぬ

吹の音も風此あつらりあき月

花茂

卒た夢此自向の程中あ葵

玄圃

己月多を端もよはくを子苗此

至峰

契りたく是れを来つる并婦人

五層

秋

秋の夜半身をきりつりて寝る所

尾花

士朗

虫の音は秋の夜半を告げしむ

羅城

夕の影をいりや空の少なき

岱青

扇をとりや枕を叩く秋の夜

南部

臥央

送りし中うきぬぬに影移れ

素郷

庭の影汲るや水はたけ何

一実

東瑠

花と志のふ蒼や竈馬ふきり

楚山

秋の雲多かりあや止ふ

水沢

魯臺

首伸く雁呼かりや喜

秋田

五明

漸きや十六夜月と此日晴

吾長

明けゆく百千の十夜静くも

礎一

山麓のあふり吹止む秋の可事

酒田

謂虹

虫の音は秋を吹くも夕アサ

忍子

けし下も月白きりし秋

雪山

秋の瑞やうきりし秋

北

暮去秋之川を新乃色を五地

善光寺

八重山や松より木の影を

李洞

五明中をくもみける若の山

猿左

あゝなれ日や照る雲の峰を

如毛

川新中を吹を吹く海を

雲帯

美しく静る中略北尾哉の家

赤間関

交二

中く中をぬも名を秋の蝶

思言

角力とり都の人と思ひ進め

吉田

石羊

吾は月ををさるくは影は影

木朶

明日中を重なる葉は光る事

出石

宇橋

あまのやうなる月の影

豊岡

野子

人事の如く月をを池に水

竜登

由璉

寺寺は静中をゆく秋の音

曙光

春も死にてまゝ音のりなる

帰木

龍溪の巻

出如山中玉や如如人月を

出如

けしき 紀念もふくむは

矢名勝

養志

其白

と哉

其白

其白

其白

其白

其白

入口の町より新秋

伊勢

養志

秋風や系馬

聴雨

柿荒の秋

西山

野崎や

五蓬

事

蓬苔

海

舎乙

名

景山

明

無曲

漸々多う皆以表少くお集うふ

宇北

鳴くく唯々鳴り高き北流う歌

獲車

けしやうくまの居たおのちり

万化

あまの種後子出ーきりく似

芝香

新築ー高よおのる叫の系

鶴壺

又急ー恒招の蒸枝の長

前橋 可里保

於意を放ー重北屋中

幾之

晴陰の浮中夕夕如扇り馬

越言田 竹茂

堀よ来ー菜日集あー高物うか

荒井 雄我

角ふをー踏る葉木の小蒸か

富山 如蘭

去くくくと重き明るきりるの月

井浪 丹房

お葉をきく新も限り此山後うか

金谷 汶弄

おりい出中身子吹下を新のを

冷列 葉阜

表の多みか葉に又咲出ぬ

赤城

玉の多しを新を新は乃を下く歌

舟笠

歳多をとり多くををりお存の海

青石

片お千鳥乃うよひや秋の蝶 遠列 是月

る一重二重と云ふ 大森 秋の雲 柙也

雨も多しと云ふ 夏梅 乃山後うね 閑嘗

月出く 源次 昔もなほと云ふ 源次

帆柱の空吹音 季栢 秋のうね 季栢

塔成 浪急 秋の夕つと云ふ り柳 巴山

事 浪急 如 浪急 夕つと云ふ 浪急 秋の風 仙真

か 浪急 ぶ 浪急 身 浪急 と 浪急 思 浪急 ふ 浪急 っ 浪急 月 浪急 如 浪急 燈 浪急 籠 浪急 至峰

人 概津 と 概津 多 概津 事 概津 多 概津 り 概津 秋 概津 の 概津 山 概津 鳥 概津 瓜坊

あ 概津 の 概津 い 概津 籠 概津 々 概津 月 概津 を 概津 水 概津 や 概津 々 概津 峰 概津 の 概津 麓 概津 曉山

秋 概津 の 概津 け 概津 音 概津 丸 概津 音 概津 々 概津 日 概津 丸 概津 形 概津 を 概津 音 概津 玉屑

音 概津 丸 概津 音 概津 々 概津 麻 概津 の 概津 お 概津 力 概津 字 概津 秋 概津 の 概津 水 概津 竹程

之 概津 浪 概津 を 概津 打 概津 越 概津 秀 概津 迫 概津 戸 概津 や 概津 丁 概津 の 概津 夢 概津 祖竹



冬

出列

曉の體如輝雪 吹石 完来

雲雀あふ日もあり 吹石

待たぬあまのこね 可里保

月影や 歌永

小くもせぬ物をも 眉山

星見え 分字

るは 文川

金谷

く 櫻雲

雪は日此人美し 丹

埋んとそハ 戸出 午石

いと 格壺

く 月波

志のころも 梅午

むくくと 浪花 玉馬

雪 過橋

月をさす千漏川時るは扉をさす

手辺

形弓

炭竈乃み山平の雪小まうふ

北川

響響のうまあきりり石のく

和田山

渉舟

怪い中けは馴深を嫁の顔

克己

雪うの脊より負は鴨乃浮扉うか

箕山

和雪の中名のある山乃峰をうり

里石

川音も響る夕や和一一く純

夏梅

湖月

日北稀を様よ時るを和申ふ

土田

南元

乞食の扉安あを以を北月

前橋

四祖

炭竈北に外をさすふあつら

凌四

芥株の氷に志満る田面うぬ

枕袋

多きや頻りにをふ松乃音

寸松

木枯や暮多ありて交る須戸の浦

矢名形

録石

村雪や軽く細く冬北月

洪州

瑣尾

積雪の上上りて

君山

吹あま一一和も打更く緯切

樗仙

美相乃ほくろひもなふをふ心

栗鹿

雲從

松光れ小初麻一や冬北岸

竹田

唄糸

雪をさりのりふあ言一多の山

桃五

砂をわく久水音くく小田北鴨

至峰

村赤く免ぬ音さく中枝の雪

祖竹

橋を中浪をくく啼ふ音

竹裡

唐屋中日氣の雪よ多の雪

里急

月余れ方く中かぬぬの籠

明器

面の中為葉くく乃多の雪

み哉

志く種はく多初を雪に初より

野牛

時の中くく初を桜根如冬

竜野

二来

雪の中初はハ冬地氷くか毛

湯嶋

長圃

初まくくや地よ照初初冬月

播州

栢菴

塔鐘や雪れ初初冬月

布舟

風の初中初冬月

久下

梅枝

水の中旭中初冬月

李徑

須磨の鐘海り果を啼き

西下

竜堆

一時百馬乃神龍を流る

謂庸

舟り多し訪ひ来りしに

人の許へり遠くを

来り多し身よりたかく

五屑

名乃残好来海

歌仙り

初めと苔歩り夕暮る

音蘿

古きあまの池乃蓮葉

至峰

是るも手来りる多し

如竹

雪れ片袖少里拂ひけし

蘿

朝の月駕の霞の霞

峰

新酒ま川に流る

竹

多きく貢の儀つみあけく

一婦り降く 幸給るあり

編み年々葉袖を詠問に

以は皆あつて勢居り多き

比は老谷如流連く水伝く

使年々きりー擲をえり

休日を打乃おけり解を来く

唯呑食年々 常一に 寺

麓

峰

竹

麓

峰

弁

麓

唯

北老海草を花年 埋れー

のちきりる月子馬刀窓の舟

をらあつて風をきおのう遠き

初されきしをきおのう遠き

飯食人と汁なるに膳を長に

聖り如きれ 流文を中川

津よ入るはと心 けりきり

兼ちちりけくるれ 以風

弁

麓

峰

竹

麓

峰

弁

麓

推せりと思ふ心の折も折る

喉も蒼も白米も北色

萬葉集く神代士の鼓をやうや

去るぬ鳥しそ始るくち

桑野と傳ふるく小風呂家

去年の傘をとく房さぬ

名も夕つた里是村隣

稻香送る大教字ゆる

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

為権を折し伝説のなごり

土柄もそのつち傳は降る

る西は日取とさゆる雲の色

よきよき上をぬ三本の夏

睦み住しを花乃をれおどる

香も香も蝶の飛

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

竹峰

後序

あゝ平 遊免れ 枕し 是歩 枕るの 是か 乃  
耶 鄒の 子 久 良 あり 又 故 際 の 枕 枕  
枕る ぬ あゝ 妻 久 小 舟 の 世 の 今 年 一  
の け ぎ り と あり 事 久 ぬ 所 七 年 一 阿 中 を  
を 久 裕 の 海 子 是 ぬ 一 年 七 枕 ぬ ぬ  
也 子 の 心 免 の 枕 ぬ ぬ 一 四 時 の 榮 枕  
下 枕 ぬ 心 一 子 心 ぬ ぬ 念 子 心 ぬ ぬ

あゝ ぬ 山 海 嶽 枕 の 秋 秋 百 多 種 の 意  
き ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ ぬ  
法 乃 道 一 一 建 一 人 一 七 白 一 又 法 經  
の 意 汝 交 幸 道 の 友 人 乃 白 一 枕 の 一  
に 殘 念 あり 一 一 枕 の 修 釋 一 念 一 人 一  
那 一 年 一 人 の 枕 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ぬ 事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ぬ 事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ぬ 事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
ぬ 事 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

しほらう一巻一巻のうっかこ子尾る序  
竹の葉こよのぼり海より形くあまはら  
いゆきはる川せみのハチことの人  
去るまに山のついでと一三年は苔  
花咲け塚やよ又つらけ海よさ  
うちまや 竹子、さしをるたうたう  
もたのさつふゆふをものつあはれ  
花のあまなるるを集れ後くかん

つちくも向所の袖をひたすの  
あはれつら葉の本玉屑を  
るるふらわの夢をるるを

寛政八年春るる





蕉門書林  
皇都寺町通二條  
橘屋治兵衛梓



